アルテス　リベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要）
第67号　2000年12月　117頁～129頁

モーリヤックの『テレーズ・デスケルー』に見られる小説技法

加　藤　宏　幸

小説家遠藤周作は，自分がもっとも愛する小説として，フランソワ・モーリヤック François Mauriac の『テレーズ・デスケルー』*Thérèse Desqueyroux* を挙げて，「私の愛した小説」と題して，詳細に論じている。遠藤周作はこの小説の凄さを数多く示し解説しているが，その紹介は次回に譲ることにする。私としてはこの小説の素晴らしさはその小説技法にあると思うので，『テレーズ・デスケルー』という作品を通してモーリヤックの小説技法の一端を紹介したいと思う。

モーリヤックはフランス南西部に生まれ，パリに出る20歳までこの土地で過ごした。松林とブドウ畑しかないこの風土が，彼の精神形成にそして彼の作品形成に大きな影響を与えたことは確かである。彼は無意識的記憶を用いて過去を再発見して行くが，そこには『失われた時を求めて』の作者プルートの影響を認めることができる。モーリヤックが凝視するのは専ら人間の内面であり，しかも人間の混沌とした内面である。つまり人間の内部にある砂漠である。しかもこの人間の混沌を巧みな技法と詩文のような魅力ある文体で描く。特に『テレーズ・デスケルー』の形式美は，最高度に達している。原文で読まなければ，彼の小説の美は理解できないように思う。

Ⅰ．フランソワ・モーリヤックの生涯

1885年10月11日，モーリヤックはボルドー Bordeaux で生まれた。ジャン＝ポール Jean-Paul とクレール Claire の第５子である。母方は代々ボルドー出身の家柄であり，父方はランド地方 Landes の出身である。彼はいつも，自分の中にある文学的才能はこの二重の家系から生まれたと信じていた。1887年６月，父が死亡した。母と５人の子供は母方の祖母の家に転居する。この家のことをモーリヤックは，彼のいくつかの小説の中で描くであろう。

1888年，ランド地方のサン＝サンフォリアン Saint-Symphorien 出身の祖母が死去した。彼女を通してモーリヤック家はランド地方と結びつき，そこに広大な所有地を持つことになる。数千ヘクタールのランド地方の土地を相続した祖父は，1890年に死去した。モーリヤックはこの祖父から大きな影響を受け，彼の作品の数多くの人物にその特徴が認められる。

1892年，コレージュ・マリアニットに入学した。1896年，10歳のとき，初聖体拝領をした。宗教は彼に感動的な喜びを与え，彼を豊かにしてくれる。1898年，13歳頃に，モーリヤックは文学に目覚め，詩に興味を抱いた。最初はラマルチーヌ，ミュッセ，ヴィニーなどに興味を持ち，コレージュ卒業後はヴェルレーヌ，ランボー，ボードレール，ジャムを夢中になって読む。その後ラシーヌとバルザックも読むようになる。1902年にはバレスを，1903年にはアナトール・フランスを発見する。

1904年，モーリヤックは哲学バカロレアに合格し，ボルドー大学文学部に入学した。パスカルの専門家であるフォルテュナ・ストロウスキー Fortunat Strowski の講義を聴く。1907年9月，パリに出て古文書学校に入学する準備を始めた。マリスト修道会の寄宿舎に入ったので，厳しい規律に縛られる。1908年11月，古文書学校に入学した。マリスト修道会の寄宿舎を出て，数か月小さなホテルに滞在し，1909年から結婚する1913年までヴァノー通り45番地に住む。復活祭の日に古文書学校を退学する。文学の道に進むことを決意する。

処女詩集『合掌』*Mains jointes* 出版。宗教的感性が彼にこの作品を書かせた。1910年3月21日の「エコー・ド・パリ」誌で，モーリス・バレスがこの詩集を賞賛してくれたので，モーリヤックは大変喜んだ。1911年，『青春への訣別』出版。1913年，処女小説『鎖につながれた子供』出版。6月3日，ジャンヌ・ラフォンと結婚。1914年，長男クロード誕生（後に批評家，小説家となる）。

第一次世界大戦が勃発し，看護兵として動員される。1915－1916年，モーリヤックは国際赤十字戦線の結成に従事した。1917年，ギリシアのサロニカに派遣されたが，マラリアにかかり，本国へ送還される。除隊後，マラガールの別荘（モーリヤックが晩年まで愛した家）で静養する。1920年，『宗教心理小論』（エッセイ集）出版。小説『血と肉』出版。1921年，『上席権』出版。1922年，小説『癩者への接吻』*Le Baiser au lépreux* を出版。この小説は出版されるやいなやただちに大成功を博する――愛なき結婚をした2人，ジャン・ペルエール Jean Pélouey-re とノエミ・ダルティエール Noémi d'Artiailh の苦悩が描かれる。題名の意味は，ノエミが夫婦関係のときにジャンに与える接吻のことである。

1923年，小説『火の河』*Le Fleuve de feu* 出版――放蕩児ダニエル・トラシス Daniel Trasis と信仰を持ちながら肉欲に惹かれてゆくジゼール・ド・プレリー Gisèle de Plailly の物語。愛欲の深淵が描かれている。小説『ジェニトリックス（母）』出版。1924年，小説『悪』出版。『一詩人の生と死』を出版――夭折した友人アンドレ・ラフォンを追悼する。1925年，『愛の砂漠』*Le Désert de l'amour* 出版。――医師クレージュ Courrèges は，ラルッセル Larouselle に囲われている女性マリア・クロース Maria Cross の魅力に屈し，彼女を愛するようになる。その息子のレイモン Raymond も彼女の肉体的魅力に惹かれ，マリアを求める。17年後に2人はパリで彼女に再会するが，彼女は昔の情熱に心を動かされることはない。この作品によって，アカデミー小説大賞を受ける。

1927年，小説『テレーズ・デスケルー』*Thérèse Desqueyroux* 出版――フランスのランド地方の因習に束縛され，自由のない孤独な生活を送るテレーズ Thérèse は，無意識に夫ベルナール Bernard を毒殺しようとする。彼女は捕らえられ，予審判事の審問を受ける。自分の一家の名誉を守るために，夫ベルナールは偽証する。そのため不起訴となり釈放されたテレーズは，夜行列車に乗り自宅のあるランド地方のアルジュルーズ Argelouse の村に帰りながら，なぜ夫を毒殺しようとしたのか考え続ける。

1928年，『ジャン・ラシーヌの生涯』出版――文学の道とカトリック信仰との相克を劇作家ラシーヌに託して描く。『ボシュエ肉欲論補遺』出版――モーリヤックが体験した宗教的危機が描かれている。1929年，『ジャン・ラシーヌの生涯』についてのアンドレ・ジッドの論評に自信を得て，一層宗教と小説の問題ついて論じる方向へと進む。母の死に目にあえず後悔する。

1930年，小説『失われしもの』，エッセイ集『スペインでの発言』，『神の前の3偉人』，『ヴォルテール対パスカル』出版。1931年，『キリスト教徒の苦悩と幸福』出版。1932年，『蝮のからみあい』*Le nœud de vipères* 出版――老弁護士は築いてきた財産を家族の手に渡すまいとするが，子供たちはなんとかしてそれを得ようとする。孤独の老弁護士ルイ Louis は妻を失っ

たとき，自分が妻に抱いていた憎しみの根に愛があったと知る。ルイは孤独でありながら，幸せに包まれて死んで行く。彼は神の恩寵に浴することができた。

モーリヤック大手術を受ける。1932年，『フロントナックの神秘』出版。1933年，アカデミー・フランセーズ会員に選ばれる。エッセイ『小説家と作中人物』出版。1935年，小説『夜の終わり』*La Fin de la nuit* 出版――テレーズ・デスケルーの晩年が描かれる。テレーズは相変わらず孤独である。彼女の娘マリー Marie は成長し，ジョルジュ・フィヨ Georges Filhot という愛人を得る。彼はマリーの母テレーズに関心を寄せる。テレーズは自分の黒い心が，ジョルジュの心にもひそんでいることを彼に自覚させる。彼はテレーズと精神的母子関係を持ったことを悟る。やがて臨終の床で，テレーズはジョルジュに会うことをマリーに許される。ジョルジュはテレーズが，苦悩の生の終わり，すなわち＜夜の終わり＞を切望していることを理解する。この作品はサルトルに痛烈に批判された。

1936年，『黒い天使』出版。評伝『イエスの生涯』出版――ローマ法王庁から一部訂正を要求された。1937年，処女戯曲『アスモデ』*Asmodée* の上演（コメディー・フランセーズ劇場においてジャック・コポーの演出で上演された）。大成功を博したため，モーリヤックは戯曲にも興味を持つようになる。1939年，小説『海への道』出版。

第二次世界大戦勃発。1940年，パリ陥落。1942年，フランス全土ドイツ軍に占領される。1943年，モーリヤックはドイツに対する抵抗運動に加わった。＜深夜叢書＞の主宰者ヴェルコールに協力し，フォーレというペンネームで，この叢書の1冊として『黒い手帳』を出版した。1944年，パリ解放。1945年，戯曲『愛されぬ人々』コメディー・フランセーズ劇場で上演される。フランスでドイツ軍無条件降伏。

1947年，戯曲『通り魔』マドレーヌ劇場で上演される。1948年，雑誌「ターブル・ロンド」創刊。モーリヤックはこの雑誌を通して，右派の最高の作家と左派の最高の作家の出会いの場を提供しようとした。1950年，戯曲『地上の炎』初演（リヨンのエベルト劇場）。1952年，小説『ガリガイ』*Galigaï* 出版。ノーベル文学賞を受賞。1953年，政府の反動的植民地政策を激しく非難する。そのため，「フィガロ」紙や「ターブル・ロンド」誌と訣別し，「エクスプレス」誌に「ブロック・ノート」を書き続ける。

1954年，ディエン・ビエン・フーが陥落し，インドシナ戦争が終了する。小説『子羊』*L'Agneau* 出版――主人公グザヴィエ Xavier は神学校に入学するために列車に乗った。車内で偶然ジャンに出会い，ジャン Jean と妻ミシェル Michelle の夫婦間の危機を知る。彼らの危機をほうっておくことができず，その家庭を訪れ執り成そうとする。このようなグザヴィエの真摯な情熱は誰にも理解されない。さまざまな誤解の中でグザヴィエは人々を救おうと努める。それを一応なし終えた夜，彼はジャンの自動車に身を投げて死んでしまう。青年の死後，ジャンとミシェルは自分たちの罪に気づく。

1955年，映画シナリオ「生けるパン」出版。1958年，ド・ゴール大統領に当選する。モーリヤックは，レジオン・ドヌール勲章最高位を受ける。

1959年，『内面の記録』*Mémoires intérieurs* 出版。1961年，『エクスプレス』紙と訣別。アルジェリア問題で意見が対立したためである。1962年，アルジェリア停戦協定成立。『テレーズ・デスケルー』の映画化。『わが信ずるもの』出版――孫たちのために書かれた信仰書。1965年，『続内面の記録』――小説をまだ書くのだという意欲を読み取ることができる。1968年，5月革命勃発。1969年，小説『昔の青年』出版――若々しさにあふれた作品。1970年9月1日，午前2時40分死去。1972年，未完の小説『マルタベルヌ』出版。

II.『テレーズ・デスケルー』の内容

（序章）著者のモーリヤック自身が語っている。「テレーズ Thérèse，あなたのような人は存在しないと多くの人が言うだろう。だが私には，あなたは存在しているのだ。何年も前からあなたを観察し，しばしば歩いているところを引き止め，その正体を暴こうとしてきた私には」[1]。モーリヤックはテレーズという人物をかなり以前から心に抱き続けてきたが，今になってようやく小説の主人公として明るみに出そうとした。「私の他のすべての小説の主人公よりはるかに醜い作中人物を私が考えだしたのを見て，多くの人が驚くであろう。美徳に輝き，思いやりのある人物については，私は何も語ることはない。《思いやりのある人たち》には，物語がない。泥の肉体とすっかり交じり合って埋もれてしまった心を持っている人たちには物語があるのを知っている」[2]。作家は醜くて泥のような汚い肉体を持った人物を描こうとした。

（第1章）「弁護士がドアを開けた。テレーズ・デスケルーは裁判所の隠れた廊下で，顔に霧を感じそれを深く吸い込んだ」[3]。外には霧が下りていた。免訴だった。夫のベルナール Bernard の証言がそれに役立った。父のラロック Larroque が弁護士と彼女を待っていた。「夕闇がテレーズを包み隠し，誰にも彼女が誰であるか分からなかった。パン屋のパンと霧の匂いは彼女にとっては小さな町の夕べの匂いだけではなく，彼女はそこについに自分に戻ってきた生の匂いをも再発見した。彼女は目を閉じて，湿った眠った土地からの微風を吸い込んだ」[4]。

処方箋の偽造を見つけ，テレーズを告訴したペドメ *Pédemay* 医師が告訴を取り下げた。「溝の端で，幌を下げた4輪馬車の角灯が馬の痩せた2つの尻を照らしていた。向こうの方，道の左右に，暗い城壁のような森がそびえ立っていた。一方の斜面から他の斜面へ，道ぎわの松の梢が互いに絡み合い，そのアーチの下に神秘的な道が遠くまで続いていた。空は道の上に，枝が交錯した床を切り開いていた」[5]。テレーズが苦しんだことは父には何の関係もなかった。父は上院議員になる望みが断たれることだけを心配しいた。家族の名誉と1人娘のマリー Marie を守るために自分と相談して夫は偽証したのだ。テレーズは夫が自分を待っている荒野の1軒屋を心に浮かべた。アルジュルーズでの夫との日常生活を心に思い浮かべようとした。

（第2章）ニザン Nizan 駅へ向かう馬車の中，テレーズはもの思いに耽る。「テレーズには，自分が決してアルジュルーズに着かないように思える。着かないでくれればいいと思う」[6]。「虚偽の証言で自分を救ってくれたベルナールは最初何と言うだろう。今夜は何も聞かないだろう。しかし明日はどうだろう」[7]。予審判事との対面の場が思い出される。「判事は爆笑した。ブレーキが車輪を軋ませる。テレーズは目を覚ます。霧を胸一杯に吸い込む」[8]。「釈放……．これ以上何を望むことがあろう。ベルナールの側で生きていくには少し努力すればいい。心の奥まで彼に打ち明け，何も隠さないことに救いがある。隠していたことをすべて明るみに出す方がいいのだ，今夜にでも早速。こう決心すると，テレーズの心は喜びで一杯になった」[9]。

---

1) MAURIAC (François), *Thérèse Desqueyroux* (*Œuvres romanesques et théâtrales complètes* II,《Bibliothèque de la Pléiade》, Paris, p. 17).
2) *Ibid.*, p. 17.
3) *Ibid.*, p. 19.
4) *Ibid.*, p. 20.
5) *Ibid.*, p. 21.
6) *Ibid.*, p. 24.
7) *Ibid.*, p. 25.
8) *Ibid.*, p. 25.
9) *Ibid.*, p. 26.

「くすぶった石油ランプが，ニザン駅のあら壁を照らした。（それからすぐに，その周りに闇ができた」[10]。昔夏休みや新学期に，テレーズ・ラロック Thérèse Larroque とアンヌ・ド・ラ・トラーヴ Anne de la Trave は，列車の出発を待つ間，この道を歩いたものだった。「この道は今夜は真っ暗だ。でもあの過ぎ去った日々には，月の光で真っ白だった」[11]。彼女は各駅停車の暗い夜行列車の隅にちぢこまり，目を閉じた。夫にこの悲劇を理解させることができるだろうか。安心しなさい，心配しなくていい，と夫は言ってくれるだろうか。「テレーズの少女時代。汚れ切った河の水源に積もる雪のようなものだ」[12]。「結婚生活以前のことはすべて，私の思い出の中では清らかな面を持っていた。それは疑いもなく，消しがたい結婚生活の汚れとは対照的だった。（……）あの人生以前の歳月に，私はほんとうの人生を生きていたのだということがどうして知り得たであろう。私は清らかだった。ほんとうに天使のようだった」[13]。彼女は美しい夏の日々を思い出す。「今夜のこの堕落した女もあのアルジュルーズの夏には，若さに輝いている娘だった。そして今そこへ彼女は，夜に守られてこっそりと戻って行く」[14]。列車はユゼスト Uzest 駅に着く。

（第3章）アルジュルーズは地の果てにある。ラロック家とデスケルー家の2軒だけに人が住んでいた。テレーズは夏に耳の遠い伯母クララ Clara に見守れてここに住み，デスケルー家の長男ベルナールは，10月の猟期にだけここに住んだ。未亡人となった彼の母は一文なしのヴィクトール・ド・ラ・トラーヴ Victor de la Trave と再婚した。両家はベルナールとテレーズがいずれ結婚するようになることを願っていた。夏テレーズはアンヌと，真昼は部屋で話をし，夕方はランドの地を散策した。どうしたら単純なベルナールをこのような雑然とした世界に導き入れられるだろうか。なぜ彼と結婚したのだろう。この結婚によって，アンヌの義姉になれるという幼稚な喜びがあった。テレーズにとって，そんな絆はどうでもよかった。ベルナールの所有している2千ヘクタールの土地に無関心ではいられなかった。土地を所有することよりもむしろ結婚に避難所を見つけたかった。「何か分からない心の危機から逃れて安心したかったのである。婚約期間ほど彼女がおとなしかったことはなかった。家族というブロックの中にはめ込まれ，《しかるべき場所に身を置き》，1つの秩序の中に入って行ったのである。彼女は救われようとしていたのである」[15]。

（第4章）結婚式の日が来た。「何一つ変わらなかったが，テレーズは今後一人だけでもの思いに耽ることはできないのだと感じた」[16]。「数秒間だったが彼女は，自分の心のこの暗い力と白粉を塗ったかわいらしい顔との間に，限りない不釣り合いがあるのを発見した」[17]。彼女はその日の夜のことを考えた。「肉体で嘘をつくのは別の技術を要した。欲望や喜びや心地よい疲労を装うことは誰にでも可能な訳ではない。テレーズは自分の肉体をそのような芝居に慣らせたが，それに苦い喜びしか感じられなかった」[18]。

2人は一緒にいることに耐えられなくなり，旅行の予定を短縮して，サン＝クレール Saint-Clair に戻ろうとしていたとき，アンヌから3通の手紙が届いた。アンヌはジャン・アゼヴェ

10) *Ibid.*, p. 26.
11) *Ibid.*, p. 27.
12) *Ibid.*, p. 28.
13) *Ibid.*, pp. 28－29.
14) *Ibid.*, p. 29.
15) *Ibid.*, p. 35.
16) *Ibid.*, p. 37.
17) *Ibid.*, p. 37.
18) *Ibid.*, p. 38.

ドJean Azévédoの息子に夢中になっているということが分かった。テレーズ宛の手紙には，恋に取りつかれた女の長い幸せな訴えが書かれていた。手紙からアゼヴェドの写真が出てきた。「あれから2年たった。あのホテルの部屋で，私はピンを取り，あの青年の写真の心臓のあたりを刺した。怒り狂ってではなく，冷静に普通の行いをするかのように。洗面所に行き，穴の開いた写真を捨て，水洗装置の紐を引いた」[19]。この結婚には皆が反対した。テレーズはアンヌに結婚に幸せなどないこと，日々のつまらない慣習以外には何も期待できないことを知らせねばならないと思った。テレーズは妊娠していた。

（第5章）列車はまもなくサン＝クレールに着く。またテレーズは過去を振り返る。アンヌは庭から出ることを禁じられていた。庭でテレーズはアンヌに会った。昨年作ったドレスがだぶだぶだった。アンヌを旅行に出発させることに同意させる。アンヌの留守中に，テレーズがジャン・アゼヴェドに会い，アンヌの手紙を渡すことを約束する。「テレーズはアンヌが苦しんでいるかどうか聞く必要はなかった。闇の中で彼女の苦しんでいる声が聞こえたからだ。だが彼女には憐憫の情は全くなかった」[20]。

（第6章）アンヌとラ・トラーヴ夫妻は旅行に出発した。ベルナールは彼のような人間にはよくある脅迫観念の最初の発作に襲われていた。死の恐怖に取りつかれ始めたのである。夜時々ぜいぜい喘いでいた。「ほんとにおかしいわ，ベルナール，そんなに死を恐がるなんて！あなたは私のように，この世に生きることが全く無益だと感じたことがないの。私たちのような人たちの人生は恐ろしいほど死に似ていると思わない」[21]。

サン＝クレール駅の手前のヴィランドローVillandraut駅に着く。テレーズは，優れた男と思っていた父のこと，すべての人が友愛で結ばれているランド地方のこと，周りにいる男たちより優れていると思った夫のことを考えた。テレーズはある日，狩り小屋でジャン・アゼヴェドに初めて会った。「あなたは私がアンヌと結婚すると思っていたんですか。私がそのような栄光を策略を用いて得ようとしていたと思っているのですか」[22]。このように知性的な男性を今まで知らなかったので，テレーズはその話に幻惑されていた。そして彼は，アルジュルーズまでテレーズを送ってきてくれた。彼は何よりも精神生活を重く考えている人間であった。

（第7章）その後テレーズは，ジャン・アゼヴェドに何回か会った。アンヌ宛の手紙を一緒に直した。彼は息のつまりそうなこの土地に耐えることができないようだった。彼は言った。「自分自身を否定する堕落より悪い堕落は存在しないと言った。彼は，どんな英雄でもどんな聖人でも一度以上自分の周りを回ったのだ，そして最初に自分の限界に到達した人たちなのだと主張した。自分を超えて神を見つけなければならないのです」[23]。

ジャン・アゼヴェドが去ってから，テレーズはとりわけアルジュルーズの静寂を感じた。「静寂が訪れる。アルジュルーズの静寂。この人里離れたランドを知らない人たちには，静寂とはどんなものか分からないだろう。静寂は家を取り巻き，時々鳴いているフクロウのほかは生きるものが何もない厚い森の塊の中に凝固したかのようである（われわれは闇の中に，自分がこらえているすすり泣きを聞いているような気がする）」[24]。「彼と別れるや否や私は，果てしないトンネルの中に入り，絶えず厚くなる闇の中にどんどん入り込んで行くように思った。

19) *Ibid.*, p. 42.
20) *Ibid.*, p. 51.
21) *Ibid.*, pp. 53−55.
22) *Ibid.*, p. 57.
23) *Ibid.*, p. 62.
24) *Ibid.*, p. 63.

そして時々，窒息する前に自由な空気が見つけられるかどうか自問することがあった」[25]。

10月のある夜，アンヌ・ド・ラ・トラーヴがドアを開けた。「アルジュルーズの真っ暗な道を，梢の間の明るい空に導かれて辿り着いたのだった」[26]。アンヌはテレーズと一緒にアゼヴェドの家へ行ったが，誰もいなかった。ベルナールはアンヌを3階の部屋に閉じ込めた。

（第8章）テレーズはジャン・アゼヴェドに1通の手紙を出したが，返事はこなかった。「しかしテレーズはこの青年の世界に生きようとしていた。しかしジャンが賞賛した本をボルドーから取り寄せたが，彼女には理解できなかった」[27]。

テレーズ一家は，アルジュルーズからサン＝クレールに移った。家の前の司祭館に，教区の信者と意志の疎通を欠き，皆から傲慢だと思われていた一人の司祭がいた。だがテレーズは，この司祭に興味を抱いた。「教義や道徳に関する司祭の説教には個性がなかった。しかしテレーズは，声の抑揚や身振りに興味を持っていた。時には一つの言葉が重みを持っているように思えた。自分の心の中にあるこの混沌とした世界を解きほぐしてくれるのは彼かもしれない」[28]。テレーズは1月に女の子を出産した。「彼女はマリーが自分に似ていることを望まなかった。自分の肉体から分かれたこの肉体と共通なものは何も持ちたくなかった」[29]。生涯のこの時期テレーズは自分の娘にもほかのすべてにも関心がなかった。彼女は人間も物も自分自身の身体も心でさえも，まるで蜃気楼か自分の外に浮かんだ水蒸気のように眺めていた。ただこの虚無の中で，ベルナールだけが恐ろしいほどの現実性を帯びていた。その肥満，その鼻声，断固とした言葉の調子，その自己満足。この世界から抜け出したい。でもどのようにして，どこへ」[30]。マノ Mano の大火の日だった。「樹脂の焼ける匂いがこの炎熱の日に染み込み，太陽も汚れているように見えた。テレーズは覚えているが，ベルナールは顔をバリヨン Balion に向けて，その報告を聞いていた。頑丈な毛むくじゃらの手が，コップの上で無意識にファウラー Fowler 氏液を一滴一滴水の中に落としていた。それから彼は一気に薬を飲んだ。暑さでぼんやりしていたテレーズは，夫がいつもの2倍の分量を入れたことを警告しなかった」[31]。ベルナールは訊ねた。「いつもの薬飲んだかい。テレーズの返事を待たずに，彼はコップの中にまた薬を入れた。彼女はおそらく疲れからか無気力状態にあって黙っていた。その夜ベルナールは吐いた。ペドメ医師が彼女にその日の出来事を訊ねたが，彼女はテーブルで見たことは黙っていた」[32]。

その翌々日には彼は起き上がっていた。テレーズは本当にあの毒薬だったのか確認したかった。「最初の日，ベルナールが食堂に入ってくる前に，私はファウラー氏液を彼のコップに入れながら，このように繰り返していたのを覚えている。『一度だけ気持ちをさっぱりさせるために……彼を病気にしたのがあれだったかどうか知りたい。一度だけで，それで終わりにしよう』」[33]。闇の中に明かりが2，3見えた。列車がサン＝クレール駅に着こうとしていた。「彼は突然病気をぶり返した。テレーズは夜も昼も看病したので何も飲み込むことができなくなった」[34]。ベルナールは3週間後にようやく回復期に入った。この時期テレーズは疲れ切ってい

25) *Ibid.*, p. 63.
26) *Ibid.*, p. 64.
27) *Ibid.*, p. 66.
28) *Ibid.*, p. 68.
29) *Ibid.*, p. 69.
30) *Ibid.*, pp. 69－70.
31) *Ibid.*, p. 71.
32) *Ibid.*, p. 71.
33) *Ibid.*, p. 72.
34) *Ibid.*, p. 72.

た。「彼女はただ一人で，めまいを覚えながらトンネルを通っていた。彼女はもっとも暗い所にいた。獣のように何も考えずに，この闇から，この煙から抜け出し，戸外の空気のある所へ急いで辿り着かなければならない」[35]。

12月の初めに，ベルナールの病気が再発した。救急車でボルドーの病院に運ばれた。血液から多量の毒薬が検出された。偽造された処方箋も見つかり，テレーズに夫毒殺の嫌疑がかけられた。テレーズは弁明したが，ペドメ医師は彼女を告訴した。

（第9章）ついにサン＝クレール駅に着いた。「自分を弁解するために言うべきことは何もない。提示すべき理由さえ一つもない。もっとも簡単なことは黙っていることだ」[36]。「まさしく生きている屍だ。生きている人が味わう限りの死を味わっているのだ」[37]。

テレーズはアルジュルーズへ向かった。「無駄だった私の人生，空虚だった私の人生，果てしなく孤独だったし，運命に出口もなかった」[38]。彼女は帰り道の間に，自分を理解してくれるベルナールを勝手に作り上げていた。アルジュルーズの一室で，ベルナールは妻を見もしなかった。彼女はこう言おうとしていた。「ベルナール，私は消えます。私のことは心配しないで。あなたが望むなら，すぐにでも闇の中に出て行きます。森も闇も怖くありません。それらは私の知り合いです。われわれはお互いに知り合いです。私はこの乾き切った土地に似せて創られました。渡り鳥や動き回っている猪以外何も生きていないこの土地。追い出されてもかまいません。写真はみんな焼いてください。娘が私の名前を知らなくともかまいません。私の家族が，私が初めからいなかったと考えてくれればいいんです」[39]。夫のベルナールは言った。「おまえはおれの命令を聞いて，それに従えばいいんだ」[40]。「家族だけが大切なんだ。おれの決心を支配してきたのはいつも家族の利益だ。家族の名誉のためにおれは正義に反することに同意したのだ」[41]。「日曜日には夫婦で，サン＝クレールの教会の大ミサに出席することにする。おまえがおれと腕を組んでいるところを，皆に見てもらわなければならない」[42]。テレーズは窓の前に立ってじっとしていた。「松脂の匂いが闇を満たしていた。目には見えないがすぐ近くまで来た敵の軍隊のように，松林が家を取り囲んでいた。彼女がそのかすかな嘆きの声を聞いているこの衛兵たちは，何度も冬を過ごすうちに自分が衰弱し，炎熱の日々にはあえぐのを見るであろう。松林はこの緩やかな窒息を目撃するであろう。」[43]。ベルナールは妻に説明した。「この家を出て行くことは自分の有罪を認めることだ」[44]。「彼女には夫の声が聞こえないようであった。彼は彼女を闇に残して，出て行った」[45]。

（第10章）「テレーズは客間の闇の中に座っていた。まだ燃えさしが灰の下でくすぶっていた。彼女は身じろぎもしなかった」[46]。「自分は深い掟，冷酷な掟に従ったのだ。自分は家庭を破壊しなかった。破壊されるのは自分だろう。家の者は間違いなく自分を恐ろしい女と見るだ

35) *Ibid.*, p. 73.
36) *Ibid.*, p. 74.
37) *Ibid.*, p. 75.
38) *Ibid.*, p. 75.
39) *Ibid.*, p. 77.
40) *Ibid.*, p. 77.
41) *Ibid.*, p. 78.
42) *Ibid.*, p. 78.
43) *Ibid.*, p. 80.
44) *Ibid.*, p. 80.
45) *Ibid.*, p. 81.
46) *Ibid.*, p. 82.

ろうが，自分は家庭の方が恐ろしいと思う」[47]。

彼女が隠しておいた毒薬の包みが古いケープのポケットの中にあるかどうか確認するために，手探りで階段を登って行った。テレーズは手を入れて，蝋で封をした包みを取り出した。これで自殺できるんだ。「どうして他の眠りよりこの眠りを恐れるんだろう」[48]。テレーズはマリーの寝ている部屋に入った。「鎧戸から夜明けの光が射し込んでいる。鉄の小さなベッドが，暗闇の中で白く光っている」[49]。絶望した人がその子を死の道連れにすることがあるが，自分だってそうできる。「死とはなんだろう。死が何かを知っている人はいない。テレーズは，それが虚無だということにも確信が持てない。誰もいないのだということにも全く確信が持てない。テレーズはこのような恐怖を感じる自分を憎んだ。他人を平気でそこに投げ込もうとしたのに，彼女は虚無の前に立って後ずさりする」[50]。テレーズはコップの水にクロロフォルムを注いだ。その時，バリヨンの女房がノックせずに入ってきた。「クララさまが死んでます」[51]。

葬式にテレーズも参列した。その後の日曜日，ベルナールと一緒に教会に行った。「柱があって，彼女の姿は出席者に見えなかった。彼女の前には合唱対隊席しかなかった。後ろに群衆，右にベルナール左にラ・トラーヴ夫人がいて，四方を取り巻かれていた。正面だけが，闘牛場が闇から出ていく闘牛に開かれているように，開かれている。この空間に，２人の子供に挟まれ，ミサ服を着た１人の男が，祈りをつぶやきながら両腕を少し広げて立っていた」[52]。

（第11章）その夜，ベルナールとテレーズは，久しぶりでアルジュルーズの家に帰った。「アルジュルーズの沈黙は彼女の眠りを妨げた。彼女は風の吹く夜のほうが好きだった。松の梢の果てしない嘆きの声が，人間のやさしさを含んでいるように思えた。テレーズはこの揺らめきに身をまかせた。秋分の荒れた夜の方が，静寂な夜よりずっとよく彼女を眠らせてくれた」[53]。噂が広まっていたので，彼女は人に会うのを避けた。ベルナールとアンヌとラ・トラーヴ夫人が旅に出たので，テレーズは一人になった。「ついに，屋根の瓦にも，曇った窓ガラスにも，荒涼とした野原にも，百キロにわたる荒野や沼にも，移動する最後の砂丘にも，そして大海にも雨が降り出した」[54]。

その夜，テレーズは熱を出した。だが意識ははっきりしていた。「彼女は裸足のまま立ち上がり，窓を開けた。闇は冷たくない。だが，いつか雨が降らなくなるとは，どうしても考えられない。世界の終わりまで雨は降り続くだろう」[55]。彼女はパリでの一人暮らしについて夢想する。

「アルジュルーズではもはやほとんど物音がしなかった。午後は夜とほとんど同じくらい暗かった。１年のうちでもっとも日が短い頃は，絶え間なく降る雨が，時を一様にし，時間の区別をなくしてしまう。不変の静寂の中で，黄昏が次の黄昏と合流してしまう」[56]。「たばこを吸わないでどうして暮らせよう。あの乾いた熱い小さな物に指が触れていなければならなかった。それに絶えず指の匂いを臭ぎ，自分の口が吸っては吐く煙に部屋が浸っていなければならなかっ

47) *Ibid.*, p. 82.
48) *Ibid.*, p. 84.
49) *Ibid.*, p. 84.
50) *Ibid.*, p. 84.
51) *Ibid.*, p. 85.
52) *Ibid.*, p. 85.
53) *Ibid.*, p. 86.
54) *Ibid.*, p. 88.
55) *Ibid.*, p. 89.
56) *Ibid.*, p. 90.

た」[57]。

「松林の巨大なざわめきがアルジュルーズを満たしたが，この大海のざわめきにもかかわらず，やはりアルジュルーズは静寂だった」[58]。「このようにして，彼女の苦しみが彼女の仕事になり，この世に生きる理由になって行った」[59]。

（第12章）ベルナール，アンヌ・ド・ラ・トラーヴ，ド・ラ・トラーヴ夫人，そしてマリーが旅から戻ってきた。アンヌと婚約したドギレム Deguilhem の息子も一緒だった。血の気のないやせ細ったテレーズを見て，皆驚いた。テレーズが自分の娘のマリーのことについて聞かないので，アンヌはテレーズを責めた。「彼女はマリーのことをまず口に出さなかったので，私を軽蔑しているのだわ。どんなふうに説明すればいいのだろう。私は今自分のことで一杯で，心を占めているのは自分のことだけだということを理解してもらえないだろう。アンヌは彼女の母親や家庭のすべての女たちのように，子供を生むことしか考えず，子供のために精一杯尽くす女なのだ。でも私は，自分を見つめ，自分の本質を見極めずにはいられない」[60]。

ベルナールだけがアルジュルーズに残った。「もう彼女にはアルジュルーズが怖くはなかった。松林は遠ざかり，その列を広げ，逃げなさいと合図しているように思えた。ある夜ベルナールが彼女に言った。『アンヌの結婚まで待ってくれ。もう一度土地の者たちに一緒のところを見せてやりたいんだ。その後は，おまえの好きなようにしなさい』。その夜，彼女は眠ることができなかた。不安な喜びが彼女の目を閉じさせなかった」[61]。

「テレーズは，晩冬のむきだしの大地が見せる荒涼とした雰囲気が好きだった。ぼろ布のような枯葉が，いつまでもカシの木にくっついていた。アルジュルーズの静寂はもうなくなっていた。とても静かな日には，森は人間が自分自身を嘆くように，嘆きの声を発していた。そして森は穏やかになり，眠ってしまう。夜はいつまでもささやいていた。自分の未来の，想像できない生活の夜明け，非常に寂しいのでアルジュルーズの目覚めの時，無数のニワトリが一斉に鳴く時が懐かしくなる夜明けが訪れるであろう」[62]。

（第13章）3月のある暖かい朝，10時頃，ベルナールとテレーズはキャフェ・ド・ラ・ペのテラスに座っていた。彼が言った。「知りたいんだが……あれはおれを憎んでいたからか」[63]。「馬車の中で，ニザン街道を走っている間，サン＝クレール行きの小さな列車の中で，長い時間かけて準備したあの告白，あの探索の夜，あの辛抱強い探究，自分の行為の源までさかのぼろうとしたあの努力，――自分自身へのつらい回顧が，今やっと報われようとしている」[64]。

「テレーズは自分が罪を負いたいという奇妙な欲望を感じた。夢遊病者のようになってあのような行為をするまでには，何か月も前から自分の心の中に，犯罪の思いを抱きそれを育てなければならなかった。しかし最初の行為が遂行されてからは，明晰で激しく，自分の計画を実行し続けたのです。執拗に！」[65]。「私恐ろしい義務に従ったのです」[66]。「私は一人の人物を演じ，身振りをし，決まり文句を言い，どんな瞬間でもテレーズという一人の女を否定したくな

57) *Ibid.*, p. 92.
58) *Ibid.*, p. 92.
59) *Ibid.*, p. 92.
60) *Ibid.*, p. 97.
61) *Ibid.*, p. 99.
62) *Ibid.*, p. 99.
63) *Ibid.*, p. 101.
64) *Ibid.*, p. 101.
65) *Ibid.*, p. 103.
66) *Ibid.*, p. 103.

かったんです。私は本物でありたいと願ったんです」[67]。「ベルナール，最後だけど，あなたに許しを求めたいの」[68] とテレーズが言うと，彼は「この話はもう止めよう」[69] と言った。「私が深く愛しているのは石の町でも，講演会でも美術館でもない。そこにうごめく生きた森であり，いかなる嵐よりも狂暴な情熱が穿つ生きた森である。アルジュルーズの夜の松の呻き声も人間の声のように聞こえたからこそ心を打ったのだ」[70]。

Ⅲ.『テレーズ・デスケルー』に見られる小説技法

作家遠藤周作は，モーリヤックの『テレーズ・デスケルー』の名訳を出版しているだけでなく，『遠藤周作全集14』（新潮社，2000年6月発行）において「私の愛した小説」と題して，116ページの大部分でこの作品について詳細に分析している。これも優れた分析であるので，別の機会に紹介したい。さらに遠藤周作は傑作『深い河』（講談社，1993年）という小説において9回も『テレーズ・デスケルー』に言及しているし，この小説の主人公の一人成瀬美津子はテレーズ・デスケルーがモデルではないかと言えるぐらい彼女によく似ている。また遠藤周作は，1950年に論文「フランソワ・モーリヤック」（「近代文学」）を発表し，6月5日には戦後最初の留学生として，フランスの現代カトリック文学を研究するためフランスに旅立った。1951年の夏には，『テレーズ・デスケルー』の舞台となったフランス南西部のランド地方を徒歩旅行している。1952年には，論文「テレーズの影をおって――武田泰淳氏に」（「三田文学」）を発表した。1953年2月，帰国。遠藤周作はモーリヤックから大きな影響を受け，とりわけ彼の作品の中でも『テレーズ・デケルー』を絶賛しているが，この小説はそんなに素晴らしい小説なのであろうか。

日本語訳は杉捷夫訳（新潮文庫版，1952年）と遠藤周作訳（集英社版〈世界文学全集22〉，1966年；新潮社版〈遠藤周作全集14〉，2000年）の2冊あるが，キリスト教に造詣が深い遠藤訳の方が，作者の意図に近いように思える。私は最初杉捷夫訳を読んだが，テレーズが夫の毒殺を企てる恐ろしい小説だという印象を受けただけでそれほど感動しなかった。次に遠藤周作訳を読んでみて，その訳文を通して宗教問題がテーマになっていることを感じた。そして次にフランス語の原作を読んで，やっとこの小説の素晴らしさが理解できた。

（以下に述べることについては，「Ⅱ.『テレーズ・デスケルー』の内容」の下線を引いた部分を参照）。

この小説の主題はテレーズが神の恩寵を受けることができたかどうかであるが，私は何よりもまず，この小説におけるモーリヤックの小説技法に感心した。まず第1章の冒頭に，テレーズは「顔に〈霧〉を感じた」という文章が現れるが，第1にこの〈霧〉に注目したい。「黄昏の街に漂う〈霧〉の匂い」（第1章），「〈霧〉を胸一杯に吸い込む」（第2章）。「若い肉体が動かす〈霧〉」（第5章）。「わずかな〈霧〉が黄昏を知らせる」（第6章）。「彼女たちは草原からあふれ出てくる〈霧〉を横切った」（第7章）。「雄鶏の鳴き声が〈霧〉を引き裂くように思えた」（第10章）。「〈霧〉の匂いがする風」（第13章）。〈霧〉は小説全体に漂っていて，テレーズをいつも包んでいるかのようである。

---

67) *Ibid.*, p. 103.
68) *Ibid.*, p. 105.
69) *Ibid.*, p. 105.
70) *Ibid.*, p. 106.

第2に注目したいのは〈闇〉と〈夜〉であり，〈明暗〉である。ニザン駅に行くためにテレーズが乗った内部が暗く角灯が備わっている馬車（明暗），馬車が行く上で松の梢が交錯し，でもかすかに空が見える道（明暗）（第1章）。闇の中に照らし出されるニザン駅のあら壁（明暗）。今夜は真っ暗だが，昔は月の光で真っ白だったアンヌと歩いた道（明暗），各駅停車の暗い夜行列車，汚れ切った水源に積もる雪のようであった少女時代（明暗），堕落した現在のテレーズと若さに輝いていた昔のテレーズ（明暗）（第2章）。心の暗い力と白粉を塗ったかわいらしい顔（明暗）（第4章）。闇の中で苦しむアンヌ（第5章）。自分のすすり泣きが聞こえるような闇，果てしないトンネルと絶えず厚くなる闇，真っ暗な道と梢の間の明るい空（明暗）（第7章）。夜行列車の窓から見える2，3の明かり（明暗），トンネルの闇から抜け出せないテレーズ（第8章）。森も闇も怖くないテレーズ，松脂の匂いに満たされた闇（第9章）。客間の闇の中に座っているテレーズ，暗闇の中で白く光っているベッド（明暗），闘牛場が闇から出ていく闘牛に開かれているように，テレーズに向かって開かれた明るい祭壇（明暗）（第10章）。冷たくない闇（第11章）。

このように何度も繰り返し現れる〈闇〉と〈夜〉と〈明暗〉もまた〈霧〉と同じようにこの小説を覆っているが，これこそまさに主人公テレーズの心の闇であり，明るさは闇から抜け出そうとする彼女のかすかな希望である。夫にもう自由にしていいと言われたテレーズは，ようやく深い闇のトンネルを抜け出ることができた。パリに出てきて夫と別れたテレーズ。「テレーズは少し酒を飲み，たばこをたくさん吸った。幸福な人のように一人で笑った。念入りに頬紅をつけ，口紅をつけた。それから通りに出て，あてもなく歩いた」。白昼のパリの街を歩くテレーズ。彼女はやっと闇から明るみに出たのである。

第3に注目したいことは，アルジュルーズの〈静寂〉である。「この人里離れたランドを知らない人には，〈静寂〉とはどんなものか分からないだろう。〈静寂〉は家を取り巻き，時々鳴いているフクロウのほかは生きるものが何もない厚い森の塊の中に凝固したかのようである」（第7章）。1年のうちでもっとも日が短い秋分の頃は，もはやほとんど物音がしない。久し振りでアルジュルーズに帰ると，沈黙がテレーズの眠りを妨げる。松林がざわめいていても〈静寂〉なのである（第11章）。アルジュルーズの〈静寂〉はテレーズの心を癒す〈静寂〉ではなく，彼女を孤独の奥深くに追い込み，精神を狂わす〈静寂〉なのである。

第4に注目したいことは，テレーズが絶えず〈たばこ〉を吸っていることである。「〈たばこ〉を吸わないでどうして暮らせよう。（……）自分の口が吸って吐く煙に部屋が浸っていなければならなかった」（第11章）。そして小説の最後の文章。「テレーズは少し酒を飲み，〈たばこ〉をたくさん吸った」（第13章）。〈たばこ〉の煙がもうもうと立ち込めている部屋に一人でいるテレーズを想像すると恐ろしくなる。

〈霧〉，〈闇〉，〈明暗〉，〈静寂〉，〈たばこ〉。これらの言葉が，『テレーズ・デスケルー』という小説を理解するキーワードである。このキーワードだけでテレーズが置かれた精神状況が分かるように思われる。さらにモーリヤックの他の小説技法にも注目しなければならない。この小説に登場する人物は，テレーズ・デスケルー，ベルナール・デスケルー，再婚した彼らの母親のラ・トラーヴ，彼らの義妹のアンヌ・ド・ラ・トラーヴ，テレーズの伯母クララ，デスケルー家の召使バリオン夫妻，テレーズの父ラロック，デスケルー夫妻の娘マリー，アンヌが愛した青年ジャン・アゼヴェド，アンヌの婚約者ドギレムである。この小説では，主人公テレーズが予審で免訴になり，裁判所を出て，過去を振り返りながら夜行列車で夫のいるアルジュルーズに戻るのが第1部を構成し，夫ベルナールを中心とする家族との生活が第2部を構成しているように思える。第1部でも第2部でも主人公はテレーズであり，主として彼女

が自分の心理を語る。しかしここで注目すべきことは，心理を語るのは彼女だけではないということである。ベルナールもアンヌもラ・トラーヴ夫人もアゼヴェドも，マリーを除いてすべての人が，テレーズの思考を遮って自分の心理を語るのである。この交錯はまことに見事である。このようなたくさんの人物の心理が交錯しながらも，小説全体が見事に統一されている小説は他にないのではなかろうか。

さらにこの小説の舞台となっているフランス南西部のランド地方についても注目しておかなければならない。ボルドーの南にあり，大西洋に面し，大部分がランド県に含まれるフランス最大の森林地帯である。『テレーズ・デスケルー』に描かれているランド地方の描写によれば，松林とブドー畑がその土地の大部分を占め，夏はほとんど雨が降らず，炎熱の日が毎日続き，10月からは今度は雨が降り続くようになる。夏には時々大火事が起こるので，ランド地方の人々は夏には非常に火を恐れる。ファウラー氏液を夫のベルナールが通常の2倍飲むのをテレーズが何も言わずに見ていたのもマノの大火事のときである。ボルドー生まれのモーリヤックはこの地方をよく知っていて，彼の多くの小説の舞台となっている。特に晩年の作品の舞台はほとんどがこの地方である。彼が「アルジュルーズは真実地の果てである」と言っているこの村は架空の村である。テレーズの物語がランド地方を舞台に展開されているが，この地方の自然がテレーズの心の的確な反映となっている。

モーリヤックはこの作品をどのような意図で書いたのだろうか。それは作者によって書物の扉に引用されているボードレールの『パリの憂鬱』からの引用から読み取ることができる。「主よ，哀れんでください，精神の狂った男女を哀れんでください！おお，創造主よ！どうして彼らが存在し，どうして彼らが『作られたか』，どうして『作られなかったのか』を知っておられるただ一人の人の眼には怪物は存在するのでしょうか……」。またこの作品の意図は序章からも読み取ることができる。モーリヤックは，美徳で輝く人物ではなく，「泥の肉体とすっかり交じり合って埋もれてしまった心を持っている人たち」を描こうとした。「テレーズよ，苦しみがあなたを神に委ねることを私は願った」。「とにかく，私があなたを見捨てるこの歩道で，あなたが一人ぼっちでないことを希望する」（遠藤周作訳「だからあなたと別れるこの歩道で，今後はあなたにはキリストがついていかれることをぼくは願っているのである」）。教会において人が司祭に告解するように，テレーズは夫のベルナールに自分の罪のすべてを告白し，「許してほしい」と言った。この場合，彼女にとってはベルナールは司祭であり神の立場にある。しかしベルナールは許すとは言わなかった。でも作者モーリヤックは，夫を毒殺しようとしたテレーズであっても，神の恩寵に浴し救われると考えているのである。